

いじめに対する意見と原因の認識

著者	鈴木 康平, 田口 広明, 田口 恵子
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	39
ページ	303-317
発行年	1990-09-30
その他の言語のタイトル	The Causes of Bullying in School : An Analysis of the Perceptions of Sophomores, Student-teachers and Class teachers.
URL	http://hdl.handle.net/2298/950

いじめに対する意見と原因の認識

鈴木康平*・田口広明**・田口恵子***

The Causes of Bullying in School : An Analysis of the Perceptions of Sophomores, Student-teachers and Class teachers.

Kouhei SUZUKI*, Hiroaki TAGUCHI** and Keiko TAGUCHI***

(Received May 21, 1990)

This study is part of an ongoing attempt to identify the critical causes of bullying by children in school. An earlier stage of the research based on a 5-point rating-scale-type questions, indicated that the way children report instances of bullying is related to their prior conception of permissible degree of bullying.

A further questionnaire was administered to a group of sophomore students, to student-teachers and to class teachers, and the analysis of the open-ended-type answers when it yielded reflected a similar pattern, i.e., that subjects' prior conceptions of permissible degree of bullying affected the way that they reacted to reports of specific instances of bullying.

Key words: bullying in school, permissible degree of bullying, perceived causes of bullying.

問 題

「法務省人権擁護局は10日付けで急増する不登校児の人権の実態をまとめた調査結果を発表した。それによるとこれまで本格調査もなく把握されていなかった不登校児の受け入れ施設は、全国で250カ所約3000人に上る実態がわかった。・・・学校に行けなくなった原因（複数回答）では、友達関係をあげた回答が522とトップ，・・・“友達ができないため”が19.8%でもっとも多く“仲間外れにされて”“友達となじめない”と合わせると，約半数（47.3%）を占めた。いじめ関係を原因としてあげた回答も30.9%あった。（以下略）」（熊本日日新聞1989.9.11 朝刊）と報道され，いじめに絡む問題の根深さをうかがわせる。われわれは，すでに昭和60年6月，日本社会心理学会の公開シンポジウムが熊本で開催された折り，「いじめの社会心理学」との題のもと，筆者（鈴木）が司会をつとめ，この問題にアプローチを試みたが，さらに，同年10月，東京大学で日本社会

1) *心理学科 **荒尾市立荒尾第一小学校 ***菊水町立菊水中学校

2) 本研究は、日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会（1989東京大学）において発表されたもののまとめである。

3) 本研究は、平成元年度科学研究費による研究（総合(A)・課題番号01301010）「価値観の形成とその規定因に関する社会心理学的研究」（代表・東京大学・古畑和孝）のうち、分担課題「価値からの逸脱としてのいじめ——発達社会心理学的アプローチ——」にかかわるものである。

心理学会が開かれたとき、シンポジウム「現今の教育問題と社会心理学よりの提言」(司会：東京大学・古畑和孝)の中で、筆者(鈴木)が、「いじめの心理・熊本シンポジウムをふまえて」と題して、熊本シンポジウムの成果をふまえて、鈴木独自の調査に基づく見解も加味して発表した。さらに昭和61年10月名古屋大学で開かれた日本心理学会でのシンポジウム「いじめ—いじめられの諸問題」(司会：東京都立大学・詫摩武俊)において、鈴木は、「いじめの心理—原因・動機と指導—」と題して自らの調査を基に発表した。ついで翌昭和62年10月鈴木は、「現代いじめ再考」と題する小論を公にした(鈴木1987)。これらの経緯をたどる中で、いじめは根絶可能と考えているのか、それとも不可能と思っているのかといった点について考え方の違いが、いじめそのものについての許容度を含めた、いじめに対する態度一般に影響を与えているように直感的に感得するにいたった。そこで、まず、小学生と中学生を対象に、いじめ根絶は可能か不可能かの次元で群分し(中間群を含めて3群)、いじめに関する9つの意見に対する賛否の程度を尋ねたところ、それらの3群といじめの意見に対する賛否、いじめの許容度との間に有意な関係があることを見いだすことができた(鈴木1989)。

そこで今回は、大学(教育学部)2年生、教育実習中の教育学部4年生、現職教師を対象として同様の調査(いじめの定義なども加味して)を行い、それらに対する反応がどのようなものであるかを見ようとした。次の4つの観点から調査結果を分析した。

- (1) いじめの9個の意見項目への反応が、根絶可能視群、中間群、根絶不可能視群でどのような違いを見せるか。
- (2) 自由記述によるいじめに対する意見はどのような様相を見せるか。
- (3) いじめを学生、教師たちはどのようなものととらえているか(定義づけ)。
- (4) 学生、教師たちは、いじめの原因を何に求めているのか。

方 法

対象：大学2年生 103名(男30名、女73名)、大学4年生(教育実習生) 113名(男40名、女73名)、現職教師82名(男59名、女23名)

調査期間：昭和63年5月～平成元年5月

調査方法：質問紙調査法・内容は、いじめの根絶視をKey項目とする9個の意見尺度(5段階評定)、いじめをどんなものと考えているか(定義)、いじめの原因をどうとらえているか(原因の認識)、そして、いじめに対しての自分自身の意見(自由記述による)、対策・指導等である。

結 果

1. いじめの9個の意見項目に対する反応

この項については、すでに鈴木が当紀要第38号(1989年)掲載の論文の中で報告しているので、ここでは、本報告の全体的な把握をする上に必要な程度の概要をまとめるにとどめる。なお、表1は、上述鈴木(1989b)の論文中から、レイアウトを少し変えて、ここに再掲載する。この項全般にわたる詳細は上述論文を参照されたい。

意見項目の中のKey項目「いじめは人間のいるところ必ずあり決してなくならない」に対する反

反応から、根絶可能視群（PO群）、中間群（MD群）、根絶不可能群（IMP群）の3群に分けた。所属群別、性別、根絶視群別に、各意見項目への反応をまとめたのが、表1であり、これを基に、独立した3要因の分散分析を施したところ、意見項目(2)(4)(6)(9)に0.1%水準で、根絶視群別の主効果が有意であることが見いだされた。すなわち、それぞれ、(2) $F=16.175$, $df=2/280$, $p<.001$ （以下自由度同じ、省略）(4) $F=7.693$, $p<.001$, (6) $F=10.384$, $p<.001$, (7) $F=5.960$, $p<.01$, (8) $F=5.235$, $p<.01$ (9) $F=10.842$ $p<.001$ であった。そして所属集団の主効果は、(5)のみが有意であった（ $F=6.274$, $df=2/280$, $p<.001$ ）。これらを概観すると次のようである。

○「いじめは悪いことであるが、人間の本性なのだから、（いじめがあっても）やむをえない」（項目2）については、PO群が、もっとも強い反対を示し、MD群がそれに続き、IMP群が、反対の程度においてもっとも弱かった（PO群； $M=1.72$, $SD=0.88$, $n=87$, MD群； $M=1.72$, $SD=0.96$, $n=100$, IMP群； $M=2.19$, $SD=0.96$, $n=111$ ）。○「いじめは人間の自然なふるまいで、それ自体、良いとか悪いとかという評価の対象にならない」（項目4）については、PO群がそうではないと強く主張し、MD群がその強さがやや弱くなり、IMP群において、それが最も弱くなっている。つまり、IMP群において、それが最も弱くなっている。つまり、IMP群が他の群に比べるといじめは自然なふるまいであるとする方向に傾きがあるのがみられる（PO群； $M=1.58$, $SD=0.84$, MD群； $M=1.79$, $SD=0.92$, IMP群； $M=2.13$, $SD=1.07$ ）。○「いじめは人間の自然なふるまいでいじめられるほうが、それによってかえって強くなっていくので、良い面がある」（項目6）この意見に対しても、PO群がもっとも強く反対し、反対の立場ではあってもIMP群が、弱い反対ということが示された。MD群は、ちょうどその中間に位置している（PO群； $M=1.44$, $SD=1.58$, MD群； $M=1.78$, $SD=0.88$, IMP群； $M=2.02$, $SD=0.94$ ）。

表1 各意見項目に対する所属集団別、性別、群別の平均（M）と標準偏差（SD）

所 属 性	項目別	(1)		(2)		(3)		(4)		(5)		(6)		(7)		(8)		(9)	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
学 部 2 年 生	男	PO	3.90 (0.94)	1.70 (0.78)	1.10 (0.30)	1.90 (1.04)	3.10 (1.51)	1.20 (0.40)	1.70 (1.10)	4.40 (0.80)	1.70 (0.90)								
		MD	4.26 (0.65)	1.74 (0.87)	1.66 (0.72)	1.74 (0.73)	3.60 (1.27)	1.74 (0.77)	1.71 (0.78)	4.26 (0.77)	2.29 (0.85)								
		IMP	4.03 (1.22)	2.16 (0.96)	1.61 (0.84)	2.18 (1.25)	3.42 (1.31)	1.95 (0.97)	2.08 (0.96)	3.68 (1.28)	2.53 (1.14)								
	女	PO	4.35 (0.98)	1.60 (0.86)	1.55 (0.81)	1.60 (0.74)	3.60 (1.28)	1.60 (0.49)	1.70 (0.78)	4.20 (0.93)	2.25 (0.83)								
		MD	4.42 (0.49)	1.70 (0.82)	1.62 (0.62)	1.62 (0.68)	3.77 (1.31)	1.62 (0.74)	1.65 (0.78)	4.35 (0.68)	2.31 (0.82)								
		IMP	4.04 (1.26)	2.22 (0.97)	1.52 (0.74)	2.33 (1.33)	3.26 (1.35)	1.93 (0.90)	2.00 (0.86)	3.78 (1.26)	2.44 (10.7)								
教 育 実 習 生	男	PO	3.83 (0.69)	1.42 (0.64)	1.58 (0.64)	1.83 (0.80)	3.92 (0.86)	1.58 (0.76)	1.83 (0.99)	3.83 (1.34)	2.08 (0.83)								
		MD	4.00 (0.87)	2.44 (1.07)	1.67 (0.94)	2.33 (1.05)	3.89 (0.87)	2.00 (0.94)	1.56 (0.83)	4.00 (1.33)	1.89 (0.99)								
		IMP	4.24 (0.76)	2.34 (0.93)	1.54 (0.77)	2.00 (0.86)	3.66 (1.10)	1.90 (0.88)	1.78 (0.81)	3.76 (0.98)	2.66 (0.84)								
	女	PO	4.00 (1.17)	1.32 (0.47)	1.16 (0.37)	1.47 (0.89)	3.53 (1.14)	1.37 (0.58)	1.26 (0.44)	4.21 (1.06)	1.89 (0.85)								
		MD	3.84 (1.18)	1.53 (0.75)	1.38 (0.55)	1.41 (0.61)	3.59 (1.32)	1.66 (0.92)	1.53 (0.71)	3.72 (1.23)	2.06 (0.79)								
		IMP	4.27 (0.81)	2.32 (0.97)	1.55 (0.84)	2.14 (0.81)	3.41 (1.11)	1.86 (0.87)	1.68 (0.82)	3.55 (1.08)	2.60 (0.78)								
現 職 教 師	男	PO	4.55 (0.92)	1.30 (0.56)	1.50 (0.97)	1.35 (0.73)	4.00 (1.34)	1.45 (0.59)	1.50 (0.59)	4.10 (1.37)	1.30 (0.46)								
		MD	4.44 (0.70)	1.75 (0.90)	1.69 (0.92)	2.31 (1.31)	4.25 (1.03)	2.00 (1.06)	1.88 (1.05)	4.44 (0.70)	1.88 (0.78)								
		IMP	4.04 (1.00)	2.04 (1.00)	1.74 (0.85)	2.09 (1.06)	3.70 (1.00)	2.35 (1.00)	2.04 (0.86)	3.48 (1.35)	2.44 (0.97)								
	女	PO	4.50 (0.50)	1.17 (0.37)	1.67 (0.75)	1.50 (0.76)	4.83 (0.37)	1.17 (0.37)	1.17 (0.37)	4.50 (0.50)	1.67 (0.75)								
		MD	4.38 (1.11)	1.50 (0.50)	1.38 (0.48)	1.88 (0.78)	4.25 (1.09)	1.50 (0.71)	1.50 (0.71)	4.25 (0.66)	2.25 (1.20)								
		IMP	4.00 (0.67)	2.11 (0.99)	1.67 (0.67)	2.56 (1.45)	3.78 (1.03)	2.00 (0.82)	2.22 (0.92)	3.89 (0.88)	2.22 (0.79)								

○「いじめは、悪いことであるが、いじめられる方もそれによってよくなって行くのだから、必要悪である」(項目7)に対しては、IMP群が反対の立場には立ちつつも、他の2群と比較して有意にそちらの方に傾いていて、MD群が、それに続き、PO群はそれに対して反対をもっとも強く表明している(PO群; $M=1.61$, $SD=0.80$, MD群; $M=1.65$, $SD=0.82$, IMP群; $M=1.97$, $SD=0.89$)。○「いじめはどんな理由があれ、許されない」(項目8)これに対しては、PO群が、最も強い賛意を表明し、MD群がそれに続き、IMP群がもっとも弱い賛意を表している(PO群; $M=4.17$, $SD=1.11$, MD群; $M=4.09$, $SD=1.11$, IMP群; $M=3.69$, $SD=1.04$)。○「いじめは悪いことではあるが、いじめられる方にも悪いところがあるはずだから(いじめがあっても)やむをえない」(項目9)これについては、PO群が、もっとも強く反対し、MD群が中間、IMP群は反対の度合いがもっとも弱いという傾向が浮き彫りにされた(PO群; $M=1.83$, $SD=0.88$, MD群; $M=2.11$, $SD=0.89$, IMP群; $M=2.53$, $SD=1.00$)。

さて、○「いじめは人間として最低の行為である」(項目5)については、所属集団の主効果が有意であったが、その傾向は、次の通りである。すなわち、この意見に対する学部2年生の平均は3.46、教育実習生の平均は4.14であり、現職教師の、この意見に対する賛意は他の学生2群を有意に強く引き離していることが示された。

さらに、○「いじめは人間の卑屈さの現れで、人間として情けない行為である」(項目1)及び、○「いじめは理由がしっかりしているときには(いじめることを)許される」(項目3)は、所属、集団、性、根絶視の程度の如何を問わず、それに対する反応に大差はなかった。すなわち、項目1には、賛意、項目3には反対が示されている。

2. いじめに対しての意見(自由記述による意見)

「いじめについてあなた自身の意見を書いてください」に対する回答をカテゴライズした。そのほとんどが本調査用紙の10個の意見項目にはいるものであった。複数のカテゴリーにはいるほど多岐にわたる意見を述べているものもいくつか見られたがここではそれらの初出の意見に注目し、それを基にして分類した。それが表2-1、表2-2にまとめてある。セル内にはいる頻度が少ないところも散見されるので、十分な検討とは言えないが、参考のため、尤度比検定を試みたところ、有意な傾向が所属集団別、群別ともにみられたので(前者 $\chi^2=57.836$, $df=20$, $p<.01$; 後者 $\chi^2=64.609$, $df=20$, $p<.01$)更に残差分析を行ってみた。それによると、所属集団別にみた場合には、学部2年生と現職教師が「いじめはどんな理由があれ許されない」に多く該当し、教育実習生は無答が目立った。群別で見ると、根絶不可能視のIMP群は、「いじめは人間の本性だからやむをえない」「いじめられる方が強くなるのでよい面がある」「人間のいるところ必ずありなくならない」に有意に多くの意見が該当していた。それに反し、根絶可能視のPO群は、「人間として情けない」「人間として最低の行為」に多く該当し、MD群(中間群)は、「どんな理由があれ許されない」に多くの意見が該当していた。自由記述形式での回答にも10個の意見尺度への反応と類似の傾向がみられたことは当然と言えば当然かも知れないが、いじめに対してかなり一貫した態度が本研究での被験者たちの中に形成されているものと理解することが可能である。

この表の中に、「その他」のカテゴリーがあるが、この中にはいじめに対しての意見というよりも、対処の仕方とか、原因を推測したようなものや、いじめ自体の定義の仕方によるとするものなどが混在していて、判然とカテゴライズしがたいものが多く含まれている。なお、複数のカテゴリーにまたがった意見陳述そのものは、当然のことながら、それなりの意味を持っているので、今後、分析・検討の対象としていく必要があると考えている。

表 2-1 いじめについての意見—自由記述による(所属集団別)—出現頻数・割合と尤度比検定及び残差分析

意見項目	人数と% (下段)			調整後の残差		
	学部2年生	教育実習生	現職教師	IMP	MD	PO
1 人間として情ない	6 (5.83)	4 (3.54)	5 (6.10)	0.454	— 0.922	0.518
2 人間の本性だからやむをえない	3 (2.91)	1 (0.88)	3 (3.66)	0.467	— 1.304	0.920
3 人間の自然のふるまいでよい悪いの評価の対象外	7 (6.80)	3 (2.65)	4 (4.88)	1.244	— 1.303	0.091
4 人間として最低の行為	1 (0.97)	4 (3.54)	2 (2.44)	— 1.142	1.061	0.063
5 いじめられる方が強くなるのでよい面がある	1 (0.97)	1 (0.88)	1 (1.22)	— 0.045	— 0.165	0.227
6 必要悪	3 (2.91)	1 (0.88)	5 (6.10)	— 0.079	— 1.683'	1.913'
7 どんな理由があれ許されない	33 (32.04)	16 (14.16)	28 (34.15)	1.777'	— 3.600***	2.019*
8 いじめられる方も悪いのでやむをえない	7 (6.80)	8 (7.08)	3 (3.66)	0.398	0.589	— 1.063
9 人間のいるところ必ずあり決してなくならない	13 (12.62)	13 (11.50)	9 (10.98)	0.342	— 0.101	— 0.254
10 その他	25 (24.17)	23 (20.35)	14 (17.07)	1.071	— 0.150	— 0.978
11 無 答	4 (3.88)	39 (34.51)	8 (9.76)	— 4.407**	6.233***	— 2.078**
計	103 (100.00)	113 (100.00)	82 (100.00)			

$$\chi^2_L = 57.836, df = 20, \uparrow p < .10 \quad * p < .05 \quad ** p < .01$$

表 2-2 いじめについての意見—自由記述による(根絶視群別)—出現頻数・割合と尤度比検定及び残差分析

意見項目	人数と% (下段)			調整後の残差		
	IMP	MD	PO	IMP	MD	PO
1 人間として情ない	1 (0.90)	5 (5.00)	9 (10.34)	— 2.514*	— 0.019	2.693**
2 人間の本性だからやむをえない	6 (5.41)	1 (1.00)	0 (0.00)	2.684**	— 1.093	— 1.719'
3 人間の自然のふるまいでよい悪いの評価の対象外	6 (5.41)	6 (6.00)	2 (2.30)	0.445	0.755	— 1.257
4 人間として最低の行為	0 (0.00)	3 (3.00)	4 (4.60)	— 2.063*	0.527	1.646
5 いじめられる方が強くなるのでよい面がある	3 (2.70)	0 (0.00)	0 (0.00)	2.260*	— 1.237	— 1.118
6 必要悪	5 (4.50)	3 (3.00)	1 (1.15)	1.154	— 0.014	— 1.212
7 どんな理由があれ許されない	18 (16.22)	35 (35.00)	24 (27.59)	— 2.924**	2.567*	0.442
8 いじめられる方も悪いのでやむをえない	8 (7.21)	5 (5.00)	5 (5.75)	0.651	— 0.536	— 0.136
9 人間のいるところ必ずあり決してなくならない	26 (23.42)	5 (5.00)	4 (4.60)	4.824**	— 2.570*	— 2.461*
10 その他	19 (17.12)	23 (23.00)	20 (22.99)	— 1.208	0.663	0.596
11 無 答	19 (17.12)	14 (14.00)	18 (20.69)	0.001	— 1.014	1.052
計	111 (100.00)	100 (100.00)	87 (100.00)			

$$\chi^2_L = 64.609, df = 20, \uparrow p < .10 \quad * p < .05 \quad ** p < .01$$

3. いじめについての学生・教師たちによる定義づけ

これについては「あなたは“いじめ”とは、どんなことを指すと考えていますか」に対する回答をカテゴライズして表3-1, 表3-2にまとめた。「精神的肉体的苦痛をくりかえしあたえつづけること」といったような趣旨のもの,あるいは「精神的苦痛」のみを強調したものなどに多くの回答が集まっていたが,それらのカテゴリーにここでいれてあるものの,ひとつひとつには,微妙なニュアンスの違いも感じ取られた。例えば,前出のカテゴリーでは,「精神的肉体的ダメージ」「精神的肉体的圧迫」「精神的肉体的に傷つける」「精神的肉体的に攻撃する」などのニュアンスである。それらを質的に把握し,分析することも今後努力していきたい。いじめの定義については,この時点でのわれわれの分析によれば,表3-1, 表3-2にみられる如く,所属集団別,根絶視群別いずれの次元においても,さほど大きな傾向の違いはみられなかった。

4. いじめの原因の認識

「最近のいじめの原因は何であると思いますか」に対する回答をカテゴライズしたのが,表4-1, 表4-2である。これもセル内の人数の少ないところがあり必ずしも万全な分析とはなりえないが,尤度比検定を試みたところ,所属集団別に有意な傾向がみられた(ちなみに $\chi^2=60.422$, $df=26$, $p<.01$)。そこで残差分析を施したところ,学部2年生では「異質排除」「学校問題」に原因を求めるのが他の群より多く,現職教師では「友人関係」にその原因を求めているのが他の2群より有意に多いことが見いだされた。一方,根絶視の水準群別ではきわだった傾向は見いだされ

表3-1 いじめの定義(所属集団別)

定 義	学部2年生	教育実習生	現職教師
1 精神的肉体的苦痛	30 (29.13)	30 (26.55)	39 (47.56)
2 精神的苦痛	13 (12.62)	8 (7.08)	4 (4.88)
3 仲間はずれ	7 (6.80)	6 (5.31)	5 (6.10)
4 差別・不当な扱い	7 (6.80)	5 (4.42)	5 (6.10)
5 いやがらせ・いたづら	14 (13.59)	12 (10.62)	6 (7.32)
6 言葉による暴力	4 (3.88)	11 (9.73)	4 (4.88)
7 暴力的行為	6 (5.83)	3 (2.65)	7 (8.54)
8 無 視	6 (5.83)	6 (5.31)	2 (2.44)
9 相手を攻撃	6 (5.83)	11 (9.73)	3 (3.66)
10 その他	5 (4.85)	6 (5.31)	3 (3.66)
11 無 答	5 (4.85)	15 (13.27)	3 (4.88)
計	103 (100.00)	113 (100.00)	82 (100.00)

$$\chi^2=30.096 \quad df=20 \quad ns$$

表3-2 いじめの定義(根絶視群別)

定 義	IMP	MD	PO
1 精神的肉体的苦痛	38 (34.23)	30 (30.00)	31 (35.63)
2 精神的苦痛	10 (9.01)	7 (7.00)	8 (9.20)
3 仲間はずれ	8 (7.21)	5 (5.00)	5 (5.75)
4 差別・不当な扱い	6 (5.41)	5 (5.00)	6 (6.90)
5 いやがらせ・いたづら	12 (10.81)	12 (12.00)	8 (9.20)
6 言葉による暴力	1 (0.90)	9 (9.00)	9 (10.34)
7 暴力的行為	7 (6.31)	6 (6.00)	3 (3.45)
8 無 視	5 (4.50)	7 (7.00)	2 (2.30)
9 相手を攻撃	8 (7.21)	7 (7.00)	5 (5.75)
10 その他	5 (4.50)	5 (5.00)	4 (4.60)
11 無 答	11 (9.91)	7 (7.00)	6 (6.90)
計	111 (100.00)	100 (100.00)	87 (100.00)

$$\chi^2=14.417 \quad df=20 \quad ns$$

表4-1 いじめの原因についての認識(所属群別) - 出現頻度・割合と尤度比検定及び残差分析

原 因	人数と% (下段)			調 査 後 の 残 差		
	学部2年生	教育実習生	現職教師	学部2年生	教育実習生	現職教師
1 社会問題	9 (8.74)	13 (11.50)	7 (8.54)	- 0.421	0.807	- 0.429
2 学校問題	9 (8.74)	1 (0.88)	0 (0.00)	3.750**	- 1.851†	- 1.982*
3 家庭問題	8 (7.77)	11 (9.73)	11 (13.41)	- 0.959	-0.149	1.183
4 異質排除	16 (15.53)	5 (4.42)	2 (2.44)	3.674***	- 1.665†	- 2.104*
5 欲求不満・ストレス	18 (17.48)	20 (17.70)	7 (8.54)	0.832	0.979	- 1.950
6 心(道徳心・人間性)の荒廃	6 (5.83)	12 (10.62)	11 (13.41)	- 1.654†	0.404	1.322
7 受験体制・学歴社会	10 (9.71)	12 (10.62)	2 (2.44)	0.763	1.272	- 2.195*
8 地域・親・学校の教育の低下	4 (3.88)	4 (3.54)	7 (8.54)	- 0.660	- 0.922	1.704
9 友人関係	2 (1.94)	3 (2.65)	10 (12.20)	- 1.774†	- 1.468	3.484**
10 精神的弱さ・忍耐力の欠如	3 (2.91)	2 (1.77)	3 (3.66)	- 1.510	0.211	1.378
11 感情的な要因(ねたみ・劣等感)	5 (4.85)	4 (3.54)	3 (3.66)	0.177	- 0.763	0.641
12 遊びの型が変わってきた	3 (2.91)	7 (6.19)	4 (4.88)	0.528	- 0.334	- 0.199
13 その他	9 (8.74)	15 (13.27)	14 (17.07)	- 0.931	1.466	- 0.601
14 無 答	1 (0.97)	4 (3.54)	1 (1.22)	- 1.059	0.954	0.091
計	103 (100.00)	113 (100.00)	82 (100.00)			

$$\chi^2=64.422, \quad df=26, \quad \uparrow p < .10 \quad * p < .05 \quad ** p < .01$$

表4-2 いじめの原因についての認識(根絶視群別)

原 因	IMP	MD	PO
1 社会問題	12 (10.81)	8 (8.00)	9 (10.34)
2 学校問題	5 (4.50)	2 (2.00)	3 (3.45)
3 家庭問題	12 (10.81)	7 (7.00)	11 (12.64)
4 異質排除	8 (7.21)	10 (10.00)	5 (5.75)
5 欲求不満・ストレス	17 (15.32)	17 (17.00)	11 (12.64)
6 心(道徳心・人間性)の荒廃	8 (7.21)	12 (12.00)	9 (10.34)
7 受験体制・学歴社会	10 (9.01)	5 (5.00)	9 (10.34)
8 地域・親・学校の教育の低下	5 (4.50)	6 (6.00)	4 (4.60)
9 友人関係	5 (4.50)	5 (5.00)	5 (5.75)
10 精神的弱さ・忍耐力の欠如	4 (3.60)	2 (2.00)	2 (2.30)
11 感情的な要因(ねたみ・劣等感)	6 (5.41)	3 (3.00)	3 (3.45)
12 遊びの型が変わってきた	3 (2.70)	7 (7.00)	4 (4.60)
13 その他	12 (10.81)	15 (15.00)	11 (12.64)
14 無 答	4 (3.60)	1 (1.00)	1 (1.15)
計	111 (100.00)	100 (100.00)	87 (100.00)

ず、どの群もいじめの原因を求めることにおいては一般に類似した傾向があることが見いだされた。いくつかのカテゴリーについて内容をあげると、「学校問題」では、「息の詰まるような校則」、「学校での様々な制約」などの意見があり、また、「友人関係」では、「友人関係の脆さ」、「友達と上手につき合えない」、「友達とのふれあい不足」、「他の人への無関心」などの意見であった。

考 察

いじめの9個の意見項目への反応が、根絶視の水準によって、きわだった特色を見せていることは、大きな示唆に富むものと言える。とりわけ学部2年次生、教育実習体験学生、現職教師といった所属集団の違いを超えて、いじめの根絶が可能か不可能

かといった視点からの反応のまとめの方に、より明確な傾向が見いだせたことは、このKEY項目の持つ意義の大きさを感じさせるものである。

次に、自由記述によるいじめに対する意見は、前節で述べたように、本調査票の意見項目のほとんどどこかに該当することが見い出せたが、中には、同上複数個にわたる内容を包含している回答も散見された。われわれの見解からすると、相反する方向の両極の価値が共存しているような回答がみられたことは興味深いものである。特に、根絶視の水準別に視点をおいてみた場合、相反する方向の価値が共存しているような、いわば、アンビバレンツな状態の心情を吐露している回答は、IMP群つまり、根絶不可能視群に多い傾向がみられ、PO群つまり、根絶可能視群は、比較的単一の方向の価値を簡潔に表現しているものが多い。例えば、IMP群の中に、「いじめは悪いことではあるが決してなくならないと思い、必要悪と思う、しかし、決して許されない」というものや、「いじめは人間の本性でやむをえぬものではあるが、それは悪いことである」といった類のものである。さらに、興味をひくものとして、同じPO群でも、両極価値的な表現をとっている人たちは、所属集団の年齢が上昇していくにつれて多くなる傾向がみられる。すなわち、学部2年生、教育実習生、現職教師というようにである。これは、何が原因でそうするのか現時点では憶測の域をでないで、ここではこれを詳しく言及することができない。

これらを基に考えると、いじめそのものの意義にも深く関連するところとなるのであるが、いじめの持つ様相、側面、次元の多様性、多義性といった複雑さを避けて通ることができないことが指摘されたとも言えよう。すなわち、いじめが事象として、あまりに多くの側面を持つので、人によっては、否、ほとんどの人によって、いじめとは・・・と考えているうちに、いじめのさまざまな側面が脳裏に浮かんできて、長・短所両面合わせ持つような、あるいは、こうも考えられる、ああも考えられるというような相反する方向に揺れるのかも知れない。

このように、いじめは、かつて指摘されたことがあるように、いじめの定義づけをきちんとしてからでないと同じデータを扱っても、さまざまな解釈が成り立つかもしれないという指摘はよく理解できる。それに関わらず、今の、この時点で、この国のどこかで、いじめられた（と認識して）と思い、学校に行きたくなくなる心情を味わっているさなかの子どもがいけないとは断言できない。

いじめの奥の深さに驚きと戸惑いを覚える。より強い地道なアプローチを続けていきたい。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、非常に御多忙な中を時間を割いて貴重な体験・意見をお寄せ下さった教師のみなさまに心からお礼申し上げます。また、教育実習中の附属校の教師の皆様、そして教育実習生の諸氏、さらに学部2年次生の諸氏の御協力を感謝いたします。なお本学部助教授篠原弘章氏によるコンピュータ・プログラムを使用させていただきました。記して感謝の意を表します。資料整理の助力をしてくれた学生諸氏にもあわせて謝意を表します。

文 献

深谷和子編 1986 いじめ ―家庭と学校のはざまで― 現代のエスプリNo. 228

- 古畑和孝 1985 a “いじめ”の構造を探る 学習指導研修 8(2), 42-48.
- 古畑和孝 1985 b 現今の教育問題と社会心理学よりの提言 —日本社会心理学特別報告— 児童心理39(10), 195-204.
- 古畑和孝 1986 「いじめ」問題再考—鈴木康平・小倉寿男両氏の問題提起を受けて—学習指導研修 8(11), 45-48.
- 稲村 博 1985 いじめの心理と病理 ジュリスト No. 836 23-28.
- 桂 広介・長島貞夫・真仁田昭・原野広太郎編 1985 いじめを超える！—105人提言集—児童心理39(13)
- 森田洋司 1985 学級集団における「いじめ」の構造 ジュリスト No. 836 29-35.
- 文部省編 1984 小學校生徒指導資料 3 児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題 大蔵省印刷局
- 文部省編 1985 生徒指導資料第2集 生徒指導の実践上の諸問題とその解明 大蔵省印刷局
- 西日本新聞社社会部取材編 1985 弱者いじめ 西日本新聞社
- 篠原弘章 1984 a 行動科学のBASIC 第1巻 統計解析 ナカニシヤ出版
- 篠原弘章 1984 b 行動科学のBASIC 第2巻 実験計画法 ナカニシヤ出版
- 篠原弘章 1989 行動科学のBASIC 第5巻 ノンパラメトリック法 ナカニシヤ出版
- 鈴木康平・佐藤静一・篠原弘章・吉田道雄 1986 いじめの社会心理学的研究 熊本大学教育学部附属教育工学センター紀要 3.97-115.
- 鈴木康平 1986 a “いじめ”の背景・動機・対策 学習指導研修 8(11), 34-39.
- 鈴木康平 1986 b いじめの心理 —原因・動機と指導— 日本心理学会第50回大会発表論文集 S.38.
- 鈴木康平 1987 現代社会といじめ再考 教育心理 35, 762-767.
- 鈴木康平 1989 a いじめに対する小・中学生の認識 熊本大学教育実践研究 6, 61-81.
- 鈴木康平 1989 b いじめに対する教育学部2年次生・教育実習生・現職教師の認識 熊本大学教育学部紀要 人文科学 38, 257-270.
- 鈴木康平 1989 c いじめに対する態度 九州心理学会第50回大会発表論文集 129-130.
- 鈴木康平・田口広明・高木恵子 1989 a いじめに対する意見と原因の認識(1) 日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集 129-130.
- 鈴木康平・田口広明・高木恵子 1989 b いじめに対する意見と原因の認識(2) 日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集 131-132.
- 託摩武俊 1984 こんな子がいじめる, こんな子がいじめられる 山手書房

付 録

い じ め の 調 査

この度、いじめについての先生方のお考えをぜひ承りたく、ここに質問紙を作成いたしました。非常に御多用のところ、まことに恐縮に存じますが、どうかよろしくお願い申し上げます。結果の発表については、個人にご迷惑をおかけしないように十分な配慮をいたします。

熊本大学教育学部心理学研究室 鈴木康平

小学校勤務・中学校勤務←現在の勤務校を○で囲んで下さい。

勤務年数（ ）年・（ ）年

男・女 歳

いずれかを○で囲んで下さい

1. あなたは、「いじめ」とはどんなことを指すとお考えですか。

2. あなたの小・中・高校生時代にいじめはありましたか。（イ・かロ・に○印）

イ. あった ロ. なかった

└→ いつごろ（小・中・高校）→どんな？（くわしく書いてください）

3. 最近のいじめと、あなたの小・中・高校生時代のいじめとは何か違いがありますか。

（イ・ロ・ハひとつに○印）

イ. ある ロ. ない ハ. 自分の小・中・高校時代にはいじめがなかったからこの

└→ 質問にはこたえられない。
具体的に書いてください。

4. 最近のいじめの原因は何であるとお考えですか（くわしく書いてください）

5. いじめに対する指導についておたずねします.

A. (1) これまで、いじめにどのように対処なさいましたか.

(2) 今後、いじめに気づいたとき、どのように対処しようとお考えですか.

B. いじめを根絶するために、どのような指導を心がけていらっしゃいますか. (長期・中期的立場より) (くわしく書いてください)

6. いじめをなくすために家庭や社会ではどのような指導あるいは配慮がのぞまれると思われますか.

A. いじめをなくすために家庭で親にしてほしい指導を下に書いてください.

B. いじめをなくすために社会が配慮すべきことがらを下に書いてください.

7. いじめについていくつかの意見があります。下に掲げたそれぞれの意見にあなたはどのくらい賛成ですか。反対ですか。該当する数字を○で囲んでください。

(すべての意見に対して○印を記してください)

	大いに 反対	まあ 反対	どちら もない	まあ 賛成	大いに 賛成
1) いじめは人間の卑劣さのあらわれで、人間として情けない行為である。	1	2	3	4	5
2) いじめは、悪いことであるが、人間の本性なのだから(いじめがあっても)やむをえない。	1	2	3	4	5
3) いじめは、理由がしっかりしている時には、(いじめることを)許される。	1	2	3	4	5
4) いじめは人間の自然なふるまいで、それ自体、よいとか悪いとかいう評価の対象にならない。	1	2	3	4	5
5) いじめは人間として最低の行為である。	1	2	3	4	5
6) いじめは人間の自然なふるまいでいじめられる方がそれによってかえって強くなっていくので、よい面がある。	1	2	3	4	5
7) いじめは悪いことであるが、いじめられる方も、それによって強くなっていくのだから、必要悪である。	1	2	3	4	5
8) いじめは、どんな理由があれ、許されない。	1	2	3	4	5
9) いじめは悪いことであるが、いじめられる方にも悪いところがあるはずだから(いじめがあっても)やむを	1	2	3	4	5
10) いじめは人間のいるところ必ずあり、決してなくならない。	1	2	3	4	5

8. いじめについてあなた自身の意見を書いて下さい。(たまたま、上の1)～10)の中のどれかと同じでもかまいません。その場合もあらためて下を書いてください。)

(学 生 用)

い じ め の 調 査

ここでは、皆さんがいじめについてどう考えているかを知りたくてこの調査表を作成いたしました。皆さんの自身の考えをありのままお知らせ下さい。結果の発表については、個人にご迷惑をかけないよう十分配慮いたします。記入者名も不要です。

熊本大学教育学部心理学研究室 鈴木康平

____ 学部 ____ 学科 ____ 年 男・女 ____ 歳

1. あなたは、「いじめ」とはどんなことを指すと考えていますか。

2. あなたの小・中・高校生時代にいじめはありましたか。(イ. かロ. に○印)

イ. あった ロ. なかった

└→ いつごろ (小・中・高校) → どんな? (くわしく書いてください)

3. 最近のいじめと、あなたの小・中・高校生時代のいじめとは何か違いがありますか。

(イ. ロ. ハひとつに○印)

イ. ある ロ. ない ハ. 自分の小・中・高校時代にはいじめがなかったからこの

└→ 質問にはこたえられない。
具体的に書いてください。

4. 最近のいじめの原因は何であると思いますか。(くわしく書いてください)

5. あなたが教師になった時、いじめについてどのように指導したいと思いますか.

A. いじめに気づいたとき, どのように対処しようと思いますか. (くわしく書いてください)

☐ 小学校の教師として

☐ 中学校の教師として

B. いじめを根絶するために, どのような指導を心がけますか. (長期・中期的立場より) (くわしく書いてください)

☐ 小学校の教師として

☐ 中学校の教師として

6. いじめをなくすために家庭や社会ではどのような指導あるいは配慮がのぞまれると思われますか.

A. いじめをなくすために家庭で親にしてほしい指導を下に書いてください.

B. いじめをなくすために社会が配慮すべきことがらを下に書いてください.

7. いじめについていくつかの意見があります。下に掲げたそれぞれの意見にあなたはどのくらい賛成ですか。反対ですか。該当する数字を○で囲んでください。

(すべての意見に対して○印を記してください)

	大 い に 反 対	ま あ 反 対	い ど ち ら も え な い	ま あ 賛 成	大 い に 賛 成
1) いじめは人間の卑劣さのあらわれで、人間として情けない行為である。	1	2	3	4	5
2) いじめは、悪いことであるが、人間の本性なのだから(いじめがあっても)やむをえない。	1	2	3	4	5
3) いじめは理由がしっかりしている時には、(いじめることを)許される。	1	2	3	4	5
4) いじめは人間の自然なふるまいで、それ自体、よいとか悪いとかいう評価の対象にならない。	1	2	3	4	5
5) いじめは人間として最低の行為である。	1	2	3	4	5
6) いじめは人間の自然なふるまいでいじめられる方がそれによってかえって強くなっていくので、よい面がある。	1	2	3	4	5
7) いじめは悪いことであるが、いじめられる方も、それによって強くなっていくのだから、必要悪である。	1	2	3	4	5
8) いじめは、どんな理由があれ、許されない。	1	2	3	4	5
9) いじめは悪いことであるが、いじめられる方にも悪いところがあるはずだから(いじめがあっても)やむを	1	2	3	4	5
10) いじめは人間のいるところ必ずあり、決してなくならない。	1	2	3	4	5

8. いじめについてあなた自身の意見を書いて下さい。(たまたま、上の1)～10)の中のどれかと同じでもかまいません。その場合もあらためて下を書いてください。)